
キミの笑顔を取り戻すまで。

てんのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミの笑顔を取り戻すまで。

【コード】

N8035R

【作者名】

てんのすけ

【あらすじ】

芙蓉楓に恋をした少年の様子を書いてみました。

(前書き)

主人公は土見稟ではありませんので、それでもいいという方はよろしくお願ひします。

芙蓉楓。

彼女との出会いは小学校の頃だった。

初めて見た彼女に僕は魅了された。

オドオドしたような苦笑交じりの表情。自信なさげに伏せられた目線。

彼女を観察していると、学校にいる時の彼女というのはいつもそんな気弱な少女だった。

でも、僕が初めて見た彼女というのは全く違う。

向日葵のように力強くも柔らかく笑う、そんな少女だった。

幼いころの僕はそんな魅力的な笑顔に一目で釘づけになった。

でも、僕には彼女と面と向かって話すような勇氣は無くて。

礼儀正しい彼女に付け込んで、挨拶だけを交わすしかできなかった。

「おはよう。ふようさん」

「おはようございます、あおいくん」

毎日、この言葉のやり取りをするためだけに学校に通っていたのではないが、今となってはそんなふうに思える。

それくらい僕は彼女が好きだったんだろう。

でも、そんな日々もすぐに崩れ去ってしまう。

彼女の母親が、彼女の想い人である土見稟の両親と共に帰らぬ人となってしまったのだ。

彼女は世界を否定して、すべてを見ないようにしてしまった。

母親の葬儀中、倒れてそのまま目を覚まさなくなってしまったのだ。

僕はいてもたってもいられなくなってしまう、芙蓉さんの友人である八重桜さんと一緒に彼女の様子を見に行った。

すべてを否定した芙蓉さんの姿は、どうしようもなく冷たくて、悲しみに包まれているように感じた。

彼女はものすごく弱い存在だったのだろう。

溺愛していた母親の存在がいなくなってしまうたことを受け入れられなかった。

だから、母親を消した世界を否定した。

そんな彼女に八重さんは声をかけ続けた。

「楓ちゃん。今日はとても天気がいいよ」

「楓ちゃん。そんなずっと寝てると、凜くんのこと一人占めにするからね」

「楓ちゃん……。もう、起きてよ……」

気丈にも笑って声をかける八重さんもついには涙を流した。

それでも、僕は泣けなかった。

声すらかけられなかった。

きつと、僕の秘めた想いは土見稟にも負けなくらいだと思う。

でも、それでも。

僕は彼女のために何かをすることが出来なかった。

そんな彼女だったけど、目を覚ました。

どうして目を覚ましたのかは、その時は分からなかった。

でも、彼女は目を覚ましたと同時に、今まで想いのすべてを注ぎ込んでいた土見稟に対して、敵意と憎悪を向けるようになった。

そして、何よりも酷かったのは。

彼女の微笑みは誰に向けるものでも同じように、すべてが曇ったものになった。

きつと、このことに気付いたのは彼女をずっと見ていた芙蓉さんのお父さんや、僕、大親友の八重さん、そして、ずっと彼女の想い

を受けていた土見稟だけだろう。
まるで作られた判子のような張り付けた微笑み。
太陽みたいに生命力あふれた笑顔は死んでしまった。
彼女は戻ってきたのに。
彼女は生きているのに。
それでもこんなに悲しくなるのは。
彼女の笑顔が死んでしまったからだと思う。

「土見はどこだ!!」
「探せ!! そんな遠くには行つてないはずだ!!」
「見つけたらぶつ殺せ!!」
「楓ちゃんを苦しめてる土見を許すな!!」
女子ロッカー室の外から土見を弾圧する罵声が聞こえる。
やつらは何を思ってこんな行動をしているのだろうか?
芙蓉さんのため、なのだろうか?
僕には芙蓉さんが敵視している土見と一緒に攻撃することで、芙蓉さんのために動いているという充足感を得ているだけのように思える。

本当にくだらない連中だ。
「おい、お前」
「なんですか、土見くん」
「ありがとな、助けてくれて」
勢いでロッカーに押し込めた僕に、彼は苦笑い混じりにお礼を言ってきた。
「いえ。僕がキミを助けたのは、いい加減キミが死んでしまうのではないか、って思ったからです。キミが死んでしまつては僕の願いは果たされませんから」
「それでも、ありがとな」

そう言っただけでやっぱり苦笑する彼。

ああ、キミも本当は死んでしまっているんですね。

彼女と一緒に死んでしまった。

「僕は……。諦めません。彼女が笑ってくれるまで」

僕はそのまま女子ロッカー室を出た。今はあいにく授業中。普通の生徒ならば周りにはいない。こんな時まで追いかけてまわすのは他校の生徒、今後の人生に大きな問題が発生する生徒のどちらかだろう。

教室に戻ろうとする途中、生徒指導の教師に見つかった。

そして、説教。ただ、僕は普段進んで問題を起こすような人間ではないから比較的軽めに。

しかし、僕の後につかまった土見くんは酷く怒られていた。

どうしようもないくらい、嫌な気持ちになった。

「おはよう、芙蓉さん」

「おはようございます、蒼井君」

今日も、ダメか。

相変わらずの判子のような曇った笑顔。

どうにかしようと思えば彼のように話しかけた時期もあった。

八重さんに近づいて、どうにか彼女を知ろうとした時期もあった。

しかし、彼女を知れば知るほど、僕にはどうしようもできなくて。

土見稟にしか、彼女を救うことが出来ないと知って。

僕は待つことしか出来ないと知った。

だから、このやり取りを繰り返す。

「あの、蒼井君」

だからこそ。

「？ はい？」

挨拶の次に来る言葉というイレギュラーに驚いた。

「あの、昨日、あの人と一緒に怒られていたみたいですけど、どうかしたんですか？」

彼女は前のように、凜くと彼を呼ばない。でも、彼のことに興味を持って話しかけてくれるのはいい兆候なのではないのだろうか？

「土見くんと一緒に授業中に歩いたので。しかし、まあしょうがなかったかな、と」

「どうして、ですか？」

「芙蓉さんがそれを聞くんですか？ 分かって聞いてますよね、それ」

「え、どういう……」

「芙蓉さん。貴女が土見くんを敵視するのは別にどうでもいいんです。しかし、貴女の行動で影響を受けるバカもいるということを知ってください」

何か言葉が続けようとする彼女を無視するように、僕は自分の席に座ってポータブルミュージックプレーヤーで音楽を聴き始めた。

少なからず彼女は彼を思っている。

僕はそんなことをぼんやりと考えながら、窓から見える空を見上げた。

今日はいい天気だ。

芙蓉さんと会話を交わして、数週間がたった朝。

彼女は相変わらず一人で登校して、取り巻きに囲まれていた。

僕はいつものように挨拶をしようと思っていた時だった。

「貴女に私たちの何が分かるんですか！！」

大きな声だった。そして、悲しみに包まれた叫びだった。

彼女がこんな声を上げたのは、いつものように取り巻きの一人が芙蓉さんに土見くんの悪口を吐いた時だった。

いつもだったら簡単に流す芙蓉さん。それでも、今回は流すことはしなかった。

そして、怒りを人にぶつけた。

怒りをぶつけるという行動には無縁だった芙蓉楓が怒りを前面に出した。

それだけで、教室は空間が止まったかのように静まってしまった。そして、その静まりは問題の中心にいた土見くんが教室に入ってくるまで続いた。

でも、僕は彼女の怒りが、助けを求める悲鳴のように、そして、目が覚めた赤ちゃんのような躍動感あふれる生命の産声のようにすら思えた。

だからだろう。僕の表情は自然と笑みを浮かべていた。そして、次の日。

彼女は僕の願いを叶えてくれた。

彼女は笑っていた。本物の、生きた微笑みだった。

彼の、土見稟の隣で。

僕の願いは叶った。

僕は彼女の微笑みを見ながら、知らず知らずのうちに涙を流していた。

桜舞う春風が強い卒業式の日。

僕は卒業証書を片手に持った芙蓉さんに向き合っていた。

告白するために、呼び出して向き合っていた。

「僕は、貴女が好きです」

「ゴメンなさい。私は、稟くんにすべてを捧げましたから」

一応、相당한勇氣を持って彼女に向き合っていたのだが、どうやら意味はなかったらしい。

彼女はいつも通り。ブレずに彼だけを見ている。

「そう、ですか。分かりました。土見くん、お幸せに」

「あの、少し、いいですか」

僕はそれだけ言って去ろうとしましたが、彼女は僕を呼びとめた。

「聞きたいことがあって……」

「はて、なんでしょう？」

「いつも私に挨拶をしていたのはどうしてですか？ それに、稟くんを助けたりしたのは……」

彼女の言葉を遮るように。僕は笑って答えた。

「その答えは、もう出ているはずですから。答えるまでもありません。それでは」

答えは貴女の表情に。

すべてが書いてあったので。

僕は幸せでした。

ありがとうございます。芙蓉楓さん。

そして、さよなら。

僕のこいごころ。

(後書き)

感想、意見などを頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8035r/>

キミの笑顔を取り戻すまで。

2011年3月21日17時40分発行